

# 「ユダヤ人」表象の変貌

——マルクス・ヴェーバー・ゾンバルト——

村上宏昭

はじめに

歴史叙述もことばを用いた営みである以上、過去の現実から乖離した語の意味作用がそこに介入することは避けられない。本稿ではこうした明白な事実を前提しつつ、近代ドイツにおける学問的言説の中で、「ユダヤ人」と「資本主義」という、二つの記号表現が融合されていく過程を追跡し、そこから歴史的現象の説明をめぐる問題を少しく省みることが目的となる。

周知のように、近代反ユダヤ主義の言説の中でユダヤ人と近代社会とが同一視されていたことは、近代史では早くから共通の了解事項となっている。第二次大戦以降、近代ドイツのユダヤ人問題を考察した研究の多くは、ユダヤ人と「資本主義」、あるいはより一般的に「近代」などの語に結びつける、このような反ユダヤ主義の発想に照準を合わせ、様々なアプローチからその問題性を解明しようと試みてきた<sup>(1)</sup>。だがこうした文脈の中で、ユダヤ人と資本主義とを融合させる言説それ自体を、そのまま単純に反ユダヤ主義へと直結させる発想が、戦後の研究で大勢を占めてきたことは否定できない。

その最たる例の一つが、ヴェルナー・ゾンバルトの『ユダヤ人と経済生活』（1911）であろう。ユダヤ教と資本主義を理論的に融合させたこの書は、右の発想に捉われてきた近代ドイツ史の分野では、今日に至るまで頗る評判が悪い。この書を、「擬似学問的な悪ふざけ」、「俗物的反ユダヤ主義の主題を見かけ上学問的な概念に持ち込んだ」ものと見る極端な議論は措くとしても、その資本主義描写に、「教養人の商売嫌いが滲み込んでいた」という解釈から、『ユダヤ人と経済生活』を、「読書人の反近代的姿勢と反ユダヤ主義」との結びつきという文脈で理解したり、「反資本主義的憤懣を反ユダヤ的憎悪へと転換させ」たもの、あるいは反ユダヤ主義に「学術的な品の良さ」を与えたものと見たりする議論は、今日なお根強い<sup>(2)</sup>。

だがこれらの研究において、ほとんど検証されないまま自明の前提として措定されてきた一つの言表がある。それは、「近代反ユダヤ主義がユダヤ教を資本主義と同一視した<sup>(3)</sup>」という言表である。たとえば、「産業資本主義に対する敵意や自由競争、近代的な信用・世界経済の陥穽、また社会・国家における自己の立場の零落に対する不安」を「経済的反ユダヤ主義」の中心的要素と論じたり、ドイツ農民にとって、「ユダヤ人こそが近代資本主義文明の貪欲な力の、……直接の現在の要素を代表するもの」であったとする議論などは、まさにこの言表の自明性を前提していると言えるが<sup>(4)</sup>、少し掘り下げて考えてみると、その内容はそれほど明確なものとはいえない。

それは何よりも、この言表を構成する「資本主義」という語が、その誕生以来きわめて多義的な様相を呈してきたという事情による<sup>(5)</sup>。論者によって「資本主義」語で意味される内容が様々な異なるのであれば、それに応じて「ユダヤ人」の表象もまた千差万別のものとならざるをえないだろう。それゆえ、ユダヤ人と資本主義との同一視を問題にする際には、まずはこの「資本主義」語に随伴する多義性の問題を解消する必要がある。

そこで本稿では、はじめにこの語の多義性を解決する方策を講じ、しかる後に「資本主義」語と「ユダヤ人」なる記号表現との融合過程を追跡していかなければならない。そのためには、「資本主義」語をめぐる当時の言説をまず一通り把握した上で、それをもとに「ユダヤ人」の表象を問題化するという手順をとらざるを得ない。こうした迂回路を経ることによって、上に触れたゾンバルトの『ユダヤ人と経済生活』が、単純に反ユダヤ主義との関連にのみ焦点を絞るような視点では捉えきれない面を持つことも、同時に明らかにされるはずである。

## 第1章 「資本主義」の意味構造

では、いかにして「資本主義」語の多義性を解消しうるのか。ここではとりあえず、いわゆる「意味構造」Sinnstruktur なる概念に注目しておきたい。

元来、一つの語の意味作用は、他の語との差異（ないし対立）の関係からのみ生じる<sup>(6)</sup>。つまり一つの語の意味内容の範囲は、指示対象との実体的な対応関係ではなく、他の語の意味内容との衝突によって確定される。だがこうした語（記号表現）同士の差異・対立の関係にも、またそれに応じて特定の語の説明に動員される表現（下位記号）の差異・対立関係にも、実は各々一定のパターン、「規則」Regel がある。この規則とは、「他の選択が可能な条件の下で繰り返される意味内容 Sinngehalten の同じ選択」を指し、これら「意味内容 Sinngehalten の選択と結びつきの、諸規則の一つの特殊な組み合わせ」が、「意味構造」に他ならない<sup>(7)</sup>。分かりやすく言えば、語と語の差異・対立のパターンを一定の図式に還元したものが、ここでは意味構造と呼ばれる。

注意すべきは、ここで言われる「意味内容」が Sinnhalte (n) と複数形になっていることから分かるように、この構造は、それが一定の差異のパターンに従ったものであれば、互いに異なる複数の意味内容も包含しうることである。むしろ、このような意味構造の確定に当たっては、「差異（意味作用）の規則性」に焦点が合わせられるため、そこに含まれる個々の意味内容の正確な同定は二次的な要件でしかない。それゆえ先の「資本主義」語の多義性という問題は、まさにこの構造への着目によって、いわば回避されることになる。こうした戦略に従い、本稿でも「資本主義」語の多様な意味内容をひとまず括弧に入れ、この語をめぐる言説から一個の意味構造を抽出してみることにしよう。

こうした戦略においてまず取り上げられるべきは、1902年に刊行されたゾンバルトの代表作『近代資本主義』初版であろう。「資本主義」なる語を一個の学術用語として、アカデミーの世界で最初に普及・確立させたこの書は<sup>(8)</sup>、「資本主義」語の意味構造を抽出しようとする本稿の議

論にとっても、やはり重要な位置を占める。たしかに、全二冊合わせて1300頁以上に及ぶ大著にもかかわらず、この書では「ユダヤ人」に関する記述はわずかな例外を除いてほとんど顔を出していない。また、たとえ言及された場合でも、資本主義に対するその意義はあくまで否定的なものとしてされているにすぎず<sup>(9)</sup>、そのため本稿で関心の対象となる「ユダヤ人」と「資本主義」との融合という問題には、この書は一見したところほとんど関係を持たないようにも見える。

だが、それでもなおこの『近代資本主義』初版は、その後の「資本主義」をめぐる言説の展開に対してその軌道を一定の方向に定める、いわば転轍機のような役割を担っていたという意味では、「資本主義」と「ユダヤ人」との融合という本稿での問題意識に即せば、やはり注目に値する。以下に、この書の意義を検証していこう。

まず、ゾンバルトの言う「資本主義」とは何か。それは、彼によれば、「その特有の経済形態が資本主義的企業であるような経済様式」のことである。では、ここで言われる「資本主義的企業」とは何か。それは、「貨幣価値のある業績と報酬について諸々の契約を締結し、その諸契約の総体によって、ある物的資産を活用することを目的とする経済形態」、あるいは利潤の獲得によって、「資産を再生産することを目的とする」ような経済形態のことである。この再生産に使用される物的資産とは、いわゆる「資本」を指している<sup>(10)</sup>。

だが、ゾンバルトによれば、この資本が資本としての運動、自己増殖の運動を開始するためには、その起源において「経済主体」たる企業家の中に、それ以前とは異なる特殊な精神が前提としてあらかじめ存在していなければならない。「利潤志向 *das Gewinnstreben*, 計算感覚 *der kalkulatorische Sinn*, 経済的合理主義 *der ökonomische Rationalismus*」<sup>(11)</sup>を基調とする、このいわゆる「資本主義精神」*kapitalistischer Geist* は、ゾンバルト自身の説明に従えば、「その設定された目的が、生きている人格との何らかの関係を通じて規定されるものではなく、「むしろ一つの抽象的な物的資産が、はじめから考慮の中心にある」と言う<sup>(12)</sup>。それゆえ、「資本主義精神」についてのゾンバルトの説明には、常にこうした「人格」に対する「事物」、「具体」に対する「抽象」という二項対立構造が基底に横たわることになる。

この点を、もう少し掘り下げて見ていこう。まず、資本主義（精神）を説明するための下位記号として用いられた、「利潤志向」、「計算感覚」、「経済的合理主義」という三つの表現について。ここで言われる「利潤志向」とは、「いかなるものにとってもそこで展開される活動が、一人あるいは人間の多数派集団によって固く限定された需要に向かって作用するのではなく、ただ資本の価値増殖という非人格的観点の下で、一つの資本主義的企業の業績の数量が考察されること」を意味する。ゾンバルトによれば、「そこでは個々の、それゆえ偶然的な能力・意志の制限から解放される可能性が大体において含まれている」、つまり生産の目的、「その目的設定のエネルギーがいわば客観化」され、「個人の偶然性から独立」するため、営利追求は「抽象的で、それゆえ無際限」とならざるをえない<sup>(13)</sup>。

このように、「有限な個人の需要／際限なき資本の増殖」という生産基準の分類の基底には、明らかに「人格＝個性（具体）／事物＝非個性（抽象）」という二項対立図式がある。これと同じ思考図式が、第二の「計算感覚」では、「いかなる現象をも数字に換算すること、差引勘定と照

合計算、あらゆる業績を赤裸々な貨幣価値で評価すること」<sup>(14)</sup>という形で表現されることになる。つまり、現象の質的個性を捨象し、あらゆる現象に通約可能な数字（量）に変換させて見るという事態が、この語によって意味されている。ここで、「質（個性＝具体）／量（非個性＝抽象）」という二項対立が機能しているのは、容易に見て取ることができるだろう。

第三の「合理主義」もまた、例外ではない。この語で機能する対立図式を暴露するには、ゾンバルトが生産過程における技術の発達を論じた箇所を参照すればよい。ここでゾンバルトは、18世紀以前の技術を「芸術的」、それ以後の技術を「合理的」と表現し、前者は「『親方』Meisterの人格に包み込まれて」おり、「彼と共に生き、彼と共に死ぬ」運命にあるのに対し、後者は「そのような個性の外側で誰にでも思いのままに理解しうる、手に入れうる一つの知として客観化されている」と言う<sup>(15)</sup>。後者が個性を離れて「客観化」されるのは、「あらゆる経験に固有の試行錯誤の手探り」から、「知識の基盤の計画的・方法的探求」、つまり、原理的には万人に共有されうる一定の規則に従った知的探求に移行するためだと言うが<sup>(16)</sup>、いずれにせよこのような合理主義についての説明が、やはり上の二つの語と同様、「主観的経験（個性＝具体）／客観的知（非個性＝抽象）」という二項図式に則っていることは言うまでもない。

だが、この「合理主義」語の説明にはもう一点、看過できない箇所がある。ここで、一方の対立項として「親方」Meisterが挙げられていることから窺われるように、「具体」の項に手工業が組み込まれているという点である。こうした手工業の位置づけは、明らかにゾンバルト特有の二分法、「需要充足経済」Bedarfsdeckungswirtschaftと「営利追求経済」Erwerbswirtschaftという二つの概念を前提している。

ゾンバルトは『近代資本主義』の「序説」において、歴史上の多種多様な経済形態を、このわずか二つの原理に収斂させている。彼自身の整理によれば、「生産の質量を決定する個人ないし諸個人の集団の需要」が生産の基準となる「需要充足」原理には、オイコス経済、中世都市経済における手工業・ツunft、社会主義経済が属し、「生産物の活用によって利潤獲得を目指す可能性」だけが生産の規準となり、それゆえ実質上、「生産の質・量が共に何ら限界のない」ものとなる「営利追求」原理には、帝政ローマの奴隷経済と資本主義経済が属することになる<sup>(17)</sup>。

ここでは一見して明らかのように、「利潤志向」の説明で用いられた「有限な個人の需要／無限なき物財の生産」という二項図式が機能している。上の「合理主義」の説明における、手工業と資本主義との対立、ないしその対立を形作る両者の分岐点は、「人格（個性）からの独立（客観化）」という点で、まさにこの二項図式に対応する。それゆえゾンバルトのテキストにあっては、「具体／抽象」という二項対立は、そのまま「手工業／資本主義」という図式に転換できる。

このように、ゾンバルトによる「資本主義（精神）」の説明は、場合に応じて異なった表現を採っているものの、その基底には常に同一の対立構造、「具体（個性）／抽象（非個性）」という対立のパターンが見受けられる。より正確に言えば、相対立する二項のうち、「抽象」項が「資本主義」を、「具体」項が「手工業」を始めとするそれ以外の経済形態を表象している。その限りで、ここで見られる「具体／抽象」という二項対立図式は、いわばゾンバルトの「資本主義」概念の外枠（輪郭）を縁取る、一つの「意味構造」を形成していると考えることができる。

## 第2章 『倫理』論文をめぐる論争

ところで、ゾンバルトが『近代資本主義』において資本主義の「精神」を俎上にのせることができたのは、言うまでもなくその背景に、当時それなりの研究が既に蓄積されていたという事実がある。たとえばルヨ・ブレンターノなどは、ゾンバルト以前に経済活動の「精神」に着目した論者の中では最も有名なものの一人として、第一に指を屈する存在と言えるだろう。ドイツ歴史学派経済学における資本主義理論の生成過程を跡づけた竹林史郎によれば、このブレンターノの大学教授就任演説（1888）の中で、既に資本主義精神論の萌芽が見て取れると言う<sup>(18)</sup>。

たしかに竹林の言うように、この演説で既に「最大利潤への努力」という意味での「営利衝動」Erwerbstrieb 概念が取り上げられていることは——そこに「資本主義精神」なる表現はなお見られないとはいえ——やはり注目に値する<sup>(19)</sup>。事実、ゾンバルトが「利潤志向」を別の箇所で「営利衝動」と言い換えていることからしても、このブレンターノの議論が何らかの形でゾンバルトに影響を与えた可能性は否定できない<sup>(20)</sup>。

だがその一方で、ブレンターノの議論にゾンバルトとの決定的な違いが見られることにも注意しておく必要がある。ブレンターノにとって営利衝動とは、「性衝動の他にあらゆる人間関係を全能の力として支配する原理」であり、とりわけ、「商業では、利益獲得へのいかなる機会をも最大限に活用しようという抑えがたい欲求は最も古い」、つまり人類の歴史と共に古い<sup>(21)</sup>。従って、ブレンターノにとって営利衝動そのものは、あらゆる時代、あらゆる人間関係を規制する原理ではあるが、資本主義時代に限られた現象では決してない。

このような人間観を持つブレンターノにとっては当然、営利衝動を資本主義的企業の専売特許と見なし、手工業の営みをあたかもこの衝動とは無縁であるかのように描くゾンバルトの議論は受け容れがたいものであった。だからこそブレンターノは後に、手工業と資本主義とを対立させるゾンバルトを批判した際にも、「個人的な需要の程度を上回る貨幣への渴望」を、「資本の本質から出てくる何か非人格的なものではなく、むしろ「最高に人格的なもの」と声高に主張したのである<sup>(22)</sup>。ブレンターノのこうした「営利衝動」概念には、ゾンバルトに見られたような「具体／抽象」図式はまったく機能していない。

これに対し、同じく資本主義の「精神」を問題化したマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1904-5）——いわゆる『倫理』論文——では、ゾンバルトの用いた資本主義の意味構造が明確に機能していることは、すぐに見て取ることができる。むしろこの論文は、ゾンバルトが用いた「具体／抽象」図式によって、その問題設定から叙述の細部に至るまで、強く規定されているようにも見える。ヴェーバーによる「カルヴィニズム」（＝資本主義精神の起源の一つ）の描写を見れば、それは一目瞭然であろう。

たとえば、「もっぱら神のみを思い、人間を思わない彼〔カルヴァン〕の宗教的関心」、「人間のために神があるのではなく、神のために人間が存在するのであって、あらゆる事件は……神の自己栄化のための手段としてのみ意味を持つにすぎない」というカルヴィニズムの描き方など

は、「神」を「資本」ないし「物財」という語で置き換えれば、そのままゾンバルトによる「利潤志向」の説明（「ただ資本の価値増殖という非人格的観点の下で……考察される」）へと行き着くだろう<sup>(23)</sup>。また、「計画的・合理的な努力により未来（来世）の悦びに対する確実な知識〔客観的知〕を獲得し維持しようとする態度に代えて、ここ〔「あの特にルター派的な救拯の獲得方法」〕にあるのは、現在（現世）に神との和解と交わりとを感受 fühlen〔主観的経験〕しようとする欲求」という叙述などは、まさにゾンバルトが合理主義の説明で用いた「主観的経験／客観的知」の二項図式を基礎としている<sup>(24)</sup>。

この他にもカルヴィニズムは、「荘厳な非人情性を持つ教説」，「鋼鉄のようなピューリタン商人」，「人間を計画的意図の支配に服させる」，「あの不断の自己審査と自己の生活の計画的規律」などと表現され、その「隣人愛」も、まず第一に「職業義務の履行のうちに現れる」がゆえに、「それは特に物的・非人格的性質を帯びる」ものとされる。一方これと対置されたルター派の場合、「純粹内面的な感情的信仰」，「本能的な行為と素朴な感情生活との自由な働きを阻止しようとはしな」いもの、「あの素朴，典雅，情味豊かな生活態度」などの表現を用いて描かれている<sup>(25)</sup>。両者のコントラストを際立たせるこれらのレトリックを支えているのは、「内面的感情（人格）／外面的規律（非人格）」という形に転化された、「具体／抽象」図式に他ならない。

このようにヴェーバーの描くカルヴィニズムは、「感情／規律」図式のように若干の独自性は認められるものの、明らかにゾンバルトの「具体／抽象」図式の内部でしか表象されていない。それゆえこの表象は、ヴェーバーの言う「資本主義の精神」，あるいは少なくともその説明を支える意味構造が、ゾンバルト独特の「資本主義精神」概念を拠り所としていたことを物語っている。実際ヴェーバーは、『倫理』論文で次のように資本主義企業家を表象する際には、明らかにゾンバルト特有の「資本主義（精神）」概念を、そのままの形で借用しているのである。

「多数の人に『労働を供し』て、故郷の都会の『繁栄』（資本主義に特有な人口と商業との数量を標準として見れば〔計算感覚〕）のために尽力したという満足と誇り——これらが近代的企業家の特殊な人生の喜びであり、『理想主義的』な意味を持ったのは明瞭である。それと共に資本主義的私経済の根本的特徴の一つとして、厳密な数学的計算の基礎の上に合理化され〔合理主義〕，——ゾンバルトが『計算に基づいて』と表現したように——経済上の結果を目標として〔利潤志向〕機械的・計画的に整理されており、その点で手から口への農民の生活や、特権的慣習を持った手工業者とは相反するものである〔手工業／資本主義〕ことも言うまでもない。」<sup>(26)</sup>

この文章に、ゾンバルトの資本主義概念のエッセンスがすべて凝集されていることは、容易に見て取れるだろう。ヴェーバーが、「我々の観点から本質的なものとして明らかにされる」<sup>(27)</sup>べき理念型としてのカルヴィニズムを描くとき、その「観点」とはまさに、このようにゾンバルトと同様の「資本主義（精神）」概念の意味構造を前提したものに他ならなかったのである<sup>(28)</sup>。

このヴェーバーのテーゼに対してまず批判の火の手を上げたのは、カール・フィッシャーである。たしかに、彼の議論は明らかにヴェーバーを誤読して展開されたものだが、注目すべきことにその批判の口調は、上に触れたブレンターノのゾンバルト批判と通底する部分もある。フィッシャーに言わせれば、「純粹に自己目的として、より多くの貨幣を獲得する」というのが、ヴェ

ーバーの言う資本主義精神であるが、それを「心理学的」に言い換えるならば、「力強い活動に対する個人の喜び」として把握できる。それゆえ彼にとって、資本主義精神の名の下で理解される貨幣追求は、「宗教的要因がそこに作用することはない」、「一般的な心的現象であって、そのような現象がピューリタニズム勃興以前にも既に生起していたことは自明」な事柄である<sup>(29)</sup>。

こうした誤読の根底にあるのは、資本主義を人間本性たる営利衝動の全面的展開と見なすブレンターノと同じ見解であろう。ブレンターノ自身も後に、「資本主義精神の通常の意味」を、「できうる限り多くの利益追求」と解し、ピューリタニズムはそれを「最も罪深きものとした」がゆえに、「自然な利益追求をあらゆる伝統の桎梏から解放」することを抑制したと主張している<sup>(30)</sup>。フェリックス・ラハファールによる次のようなヴェーバー批判もまた、これと同様の資本主義概念に立脚したものであった。

ラハファールにとって資本主義精神とは、「投機的計算、迅速かつ正確な景気の把握」などの美德を持つ、「まさにゾンバルトが『計算性向』と名づけたもの」だが、それは決してカルヴィニズム倫理の世俗化の産物ではなく、人間性に古くから備わる「営利衝動」の「極限形態」にすぎない<sup>(31)</sup>。たしかにカルヴィニズムの職業倫理によって、「既に存在していた『資本主義精神』が強化向上されたことは大いにありうる」ものの、それは彼にとってあくまで、「人間の中のあらゆる欲求・力・素質を発散させる」ものであり、まったく新たな衝動を創造するものではない<sup>(32)</sup>。

これらの批判に共通していることは、営利衝動を人間性の表れとして議論の前面に押し出すことで、結果的にヴェーバーやゾンバルトの「具体（人格）／抽象（非人格）」図式に、その鋭先を向けることになった点であろう。たしかにヴェーバー自身、既に『倫理』論文で営利衝動そのものが人間性に内在することを承認してはいたが<sup>(33)</sup>、上の批判への反論において改めてこの衝動と自らの資本主義精神の違いを強調せねばならなかった。その際彼が採った戦略は、人間本性たる営利衝動を、「非合理的放縱的な形で、文化発展のすべての分野とありうべき社会層のすべて」に見られるものとし、これと「『職業人』の魂」を「創造」したピューリタニズムの禁欲倫理とを、真正面から対置させるというものであった<sup>(34)</sup>。

つまりヴェーバーは、人間性の自然な発露たる営利衝動をそのまま「具体」項に封じる一方、資本主義精神の諸特徴を、「冷徹で、人間性とは無縁な『事象性』 Sachlichkeit, 『計算性向』、合理的徹底性、あらゆる生活の素朴さを取り去った労働への献身」、あるいは、「事物 Sache への専念、合理的な自己統制」などと表現し<sup>(35)</sup>、その非人格性・規律性を強調することで、自身の資本主義（精神）概念を支える「具体／抽象」図式の輪郭を、浮き彫りにさせるのである。

### 第3章 「ユダヤ人」の変貌

では、ヴェーバーと「具体／抽象」図式を共有したゾンバルトは、上のヴェーバー・テーゼに対していかなる態度で臨んだのだろうか。結論から言えば、ゾンバルトはユダヤ教に資本主義精神の起源を見出すことで、ヴェーバーの議論とは一線を画することになる。だがゾンバルトは、

ユダヤ教と資本主義とをいかなる形で融合しえたのか。

「近代社会」とユダヤ人とは、ゾンバルト以前から既に多くの理論的言説の中で結び合わされてきた。たとえばマルクスの『ユダヤ人問題によせて』（1843）でも、個人的自由や私的所有を基礎とするいわゆる「市民社会」とユダヤ人とが、同列に置かれて論じられている。その際マルクスが、「貨幣」を市民社会とユダヤ人とを接合する媒介と見ていたことは注意しておく必要がある。マルクスによれば、「実際の欲求、利己主義は市民社会の原理」であり、また、「実際の欲求と利己との神は貨幣である」がゆえに、その「現実的な本質が市民社会において普遍的に実現し、現世化した」ユダヤ人は、「貨幣人間」Geldmenschとして規定されることになる<sup>(36)</sup>。

このようなユダヤ人と貨幣とを同一視する発想自体は、言うまでもなく当時から一人マルクスに限られたものではなかった。マルクスの上の議論も、モーゼス・ヘスの用いた「ユダヤ人＝貨幣」の図式に則ったものでしかない<sup>(37)</sup>。ここで重要なのは、その後のマルクスが唯物史観を確立し、「資本家的生産様式」概念を定式化していく中で、こうした「近代＝ユダヤ人」という等式が、マルクスの近代社会論の枠組みから理論的には零れ落ちていったという点にある。その理由として、一つは下部構造への着目によってユダヤ教を含めた宗教そのものが視野の外に置かれたこと、もう一つは「貨幣」との同一視によって、「近代社会」を規定する資本家的生産様式とは理論上区別されたことが挙げられるだろう。後年のマルクスにとって貨幣の「抽象性」は、それ自体で資本家的生産様式の特徴を指示するものでは、もはやなくなっているのである。

この点を、「具体／抽象」図式の観点からもう少し具体的に見てみよう。よく知られているように、マルクスは商品を「使用価値」（商品形態）と「（交換）価値」（商品価値）の二分法で捉える。彼にとって商品の交換が成立するのは、その使用価値（質）の生産に用いられる労働力が一定の社会性を有するために、商品体自身の中に他の商品体とも通約可能な価値（量）が内在せざるをえないからである。だが、商品性質の中に眠る使用価値と価値とのこの対立（具体＝質／抽象＝量）は、交易の過程で後者の独立形態の成立へと駆り立てられ、やがて価値表示に最も適合的な金を肉体として貨幣が結晶化する<sup>(38)</sup>。それゆえマルクスの見た貨幣とは、「具体／抽象」図式に即して言えば、いわば「抽象」項の現象形態に他ならない。

ただ、マルクスにおいては、このように貨幣に体现される「抽象」項そのものは、資本家的生産様式の決定的メルクマールではない。むしろマルクスにとって、「商品生産と商品流通とは、その範囲と深さを異にしてではあるが、きわめて多種類の生産様式に属する現象」であり、かつ、「貨幣運動は商品流通の表現にすぎないのであるが、逆に商品流通は貨幣運動の結果としてしか現れない」がゆえに、貨幣と等置された「ユダヤ人」もまた、その論理的帰結として「近代社会」の本質それ自体からは、乖離せざるをえない<sup>(39)</sup>。

興味深いことに、ゾンバルトは既に『近代資本主義』刊行の翌年、つまり1903年には、ユダヤ人と近代社会を結びつけるマルクスの発想を採用していた。ゾンバルトは、「ユダヤ人の現実的な本質が市民社会において普遍的に実現した」という『ユダヤ人問題によせて』の文章を、「資本主義経済とユダヤ経済とは同一の概念ということ」だと解釈し、さらには、「19世紀に形成された我々の経済生活はユダヤ人の協働なしでは考えられなかった」とまで主張してい

る<sup>(40)</sup>。

もっとも、『ユダヤ人問題によせて』を執筆した当時のマルクスは、いまだ近代経済様式の体系化には至っておらず、ここで言われる「市民社会」も、後の資本家的生産様式とはまったく相貌を異にする<sup>(41)</sup>。それゆえゾンバルトによる上の解釈は、明らかにマルクスのテキストを誤読したものと言えるが、この誤読の裏には、実は自らの「具体／抽象」図式が作用していた。たしかにゾンバルトは、ユダヤ人の「強靱な意志」を、「ユダヤ人種の私利私欲、实际的欲求への明白な素質」に関係づけており、この点で「ユダヤ教の現世的基礎」を「实际的欲求、私利」だとするマルクスの認識と一致している<sup>(42)</sup>。

だがゾンバルトはここから、「質的価値に対する無関心」を特徴とする「ユダヤ人の抽象的素質」を強調し、貨幣をこの素質の「象徴」と位置づける。彼によれば、「貨幣所有への努力は集約的な利潤志向、営利衝動となる」が、「近代資本主義では経済生活がまったく貨幣獲得に指向」するため、「経済生活の中で資本主義の本質が貫徹されるほどユダヤ的特性の活動領域はさらに大きくなる。」それに加え、この「資本主義への移行を促進するというユダヤ的使命」は、ゾンバルトのテキストにあっては同時に、「最後の手工業の破壊」をも意味することになるのである<sup>(43)</sup>。

このゾンバルトの議論に前提されているのが、『近代資本主義』で描かれた「具体／抽象」（手工業／資本主義）図式であることは明らかであろう。つまりゾンバルトは既に1903年の時点で、こうした意味構造に基づいてユダヤ人と資本主義とを結びつけていたのである。

ただこのテキストでは、ユダヤ人の「営利衝動」（利潤志向）や「抽象性」などの表現は、ユダヤ人と資本主義との結節点として明確に機能しているものの、資本主義（精神）を説明する下位記号の一つであったはずの「合理主義」語が、この結節点としての役割をほとんど果たしていないことは、注意されねばならない。「経済活動のあらゆる領域がいかに合理主義精神に浸潤されているか」と述べた箇所はあるものの、ユダヤ人が説明される際には、上のように「利己的」、「抽象的」などの表現が用いられるか、「目的のためには手段を選ばない」、「良心の呵責のなさ」という非情さが強調されるのみで、「合理主義」語がその説明に適用されることはなかった<sup>(44)</sup>。この意味で、1903年のゾンバルトによるユダヤ人表象は、なお「私利私欲」を基調とする「貨幣人間」を論じたマルクスの影響を免れきれていない。

これは逆に言えば、ゾンバルトが「ユダヤ人」と「資本主義」との融合を試みた背景に、やはりマルクスのユダヤ人論が濃い影を落としていたことを、一面では物語っているだろう。だがその後、ゾンバルトはこの融合を理論的に精密化していく過程で、いつしかマルクスの描いたユダヤ人の表象からは、大きく逸脱していくことになる。

この点で注目されるのが、論文『資本主義企業家』（1909）の中で、ゾンバルトの「合理主義」語が「抽象」項の枠内で微妙にその意味合いを変えていることである。それは、ゾンバルトが企業家に特殊な性質として、「魂の諸特性の欠如、つまり感情的で穏やかな色彩の欠如」を挙げた点に見られる。この時点でのゾンバルトにとって、企業家のこの特性を支える「計画性」・「目的志向性」・「計算性」などはすべて「経済的合理主義」から帰結するものであり、それゆえ上の

「感情的で穏やかな色彩」とは、根本的にはこの「合理主義」の対立項として機能している<sup>(45)</sup>。

だが、『近代資本主義』初版でこの語の対義語として措定されていたのは、先に見たように何らの客観的ノウハウもない「主観的経験」か、あるいはそうでなければ、「急速に富裕になるために現れた」金採掘師や錬金術師の「夢想 Träumereien, 空想 Phantastereien」のみであって<sup>(46)</sup>、決して「感情的で穏やかな色彩」なるモメントではない。

「経済的合理主義」をその基底に持つ企業家の精神が、この1909年の論文で、「苦悩多き情感から自由」なものとして説明され、その一方で企業家も芸術家と同様に、「空想力 Phantasie を意のままにする」とされているのは<sup>(47)</sup>、合理主義の対義語が、このテキストにおいて「経験」ないし「空想」から、「情感」へとシフトしたことを意味する。ここにはおそらくヴェーバーの影響がある。1909年のゾンバルトの企業家像は、「空想」の欠如より、「非感情性」を強調する点で、『倫理』論文の、「感情／規律」図式に基づくカルヴィニズムに近い<sup>(48)</sup>。

ゾンバルトにおけるこうした「合理主義」語の意味内容の変化は、先に見た『倫理』論文をめぐる論争では当然、明確にヴェーバーの陣営へと与したことを意味する。だが彼は、自ら修正したこの資本主義企業家の表象を、1903年以来着目してきたユダヤ人の表象へとそのまま適用させることで、翻って今度はヴェーバーのテーゼに真っ向から対峙していくことになる。

そのようなゾンバルトの研究の集大成として、1911年に刊行されたのが、『ユダヤ人と経済生活』であった。この書を繙けば、そこで表象されたユダヤ人とは、これまで見てきた資本主義企業家の説明を規定してきた意味構造が、まさにそのままの形でユダヤ人の説明へと転用されたものにすぎないことが、一見して明らかとなるだろう。

たとえば、この書で言われる「ユダヤ人商人とキリスト教商人間の争い」における「二つの世界観」とは、「人間が経済的利害の中心点」にあり、それゆえ「量的に規定された消費財」という考えが中心となるキリスト教倫理と、「すべての目的の中でも利益獲得を最優先する」ユダヤ教倫理とを指すが、これはもちろん、「手工業／資本主義」という形の「具体／抽象」図式が、そのまま宗教倫理の区別に応用されたものにすぎない<sup>(49)</sup>。またユダヤ教神学における、「罪（と善行）の本質の非有機的把握」、つまり個々の罪（善行）が、「ただ質的にのみ把握される個性や行為者のすべての道徳的状态から分離され」ることで、「ちょうど金銭の額が個人的な目的とのあらゆる関連や客観的な財貨の性質から分離され」るのと同様に、行為が質を問わない純粋な「量」として計算の対象となる事態も<sup>(50)</sup>、ここで指摘されている（計算感覚）。

ゾンバルトによれば、このような特性を持つユダヤ教の本質を理解しようとするなら、その教義の基底にある「清浄」概念について正確に把握しなければならないと言う。そして、彼にとってユダヤ教における「清浄」とは「生の合理化」、つまり、「自然なままの衝動的、動物的な生き方を熟考された目的に適った道徳的生活に置き換えること」に他ならない。こうした生の合理化に基づく教義によって、ユダヤ人の「血肉の情に対する書類上の冷たさ、本能に対する悟性、直観に対する概念、感覚に対する抽象化」、つまりは「あっさりとして合理主義と名づけられる」世界観が形成される<sup>(51)</sup>。

ここからゾンバルトは、この意味での合理主義が特殊にユダヤ的な教義であることを示すため

に、ユダヤ教の成立時点にまで遡っていく。彼の説明に従えば、ユダヤ教は決して預言者たちの「抵抗しがたい内的衝動」や「魂の奥底からの呻き」によって形成されたのではなく、むしろ聖書学者の「十分に準備された計画」、「熟慮と目的意識」に基づいて作られたと言う。

「この独自の発生方式の痕跡をユダヤ教ははっきりと保持している。これらの痕跡はあらゆる根拠に基づき、我々にはまったく悟性、分別の所産としか思われぬ。……ちょうどこのユダヤ教と同じように資本主義も振舞っている。両者共に異質なものとして自然な被造物の世界に現れ、人為的な思考の産物として衝動的な生の只中に登場する。合理主義——これこそ、これらすべての特性をまとめる言葉である——はユダヤ教と資本主義両者の根本特徴である。」<sup>(52)</sup>

ここで見られるユダヤ教の像は、「血肉の情」、「内的衝動」の対立項として措定された「計画的」、「熟慮と目的意識」などが強調されている点で、ヴェーバーの描いたカルヴィニズムとまったく同質のものと言って差支えない。だからこそゾンバルトはユダヤ教の中に、「ピューリタニズムの考え方とのほとんど完全な一致」を見出し、「ピューリタニズムはユダヤ教である」とまで主張したのである。その一方で、1903年のテキストでは、ユダヤ人と資本主義との結節点となっていたユダヤ人の「私利私欲」、「荒稼ぎの精神」などは、この書ではむしろ、「人間的、あまりに人間的」（具体）とされ、語ることさえ拒否されることになる<sup>(53)</sup>。

このように、ゾンバルトはユダヤ教の「清浄」概念を「合理主義」と規定し、その「抽象性」ないし「非自然性（非感情性）」を議論の前面に押し出すことで、資本主義精神の起源をめぐってはヴェーバーと袂を分かちつものの、「感情／規律」図式に関しては、むしろヴェーバーと共有する形になっている。言い換えれば、ゾンバルトが資本主義とユダヤ教との理論的融合を完全な形で成し遂げられたのは、まさにこの「感情／規律」という二項図式を、ヴェーバーの議論からそのままの形で受け継いだことによると言える。

この図式に支えられた「合理主義」語が、以上のようにユダヤ教と資本主義の接点として位置づけられたことの意味は、もはや明白だろう。それは、マルクス以来の「ユダヤ人」像に、一つの新たな相貌を付け加えるという結果をもたらした。すなわち、1911年のゾンバルトのテキストでは、ユダヤ人は既に「私利私欲」の「衝動」に駆り立てられた強欲者などではなく、「苦悩多き情感」や「魂の呻き」を欠落させた、「冷徹な」合理主義者へと変貌していたのである。

## おわりに

はじめに触れたように、反ユダヤ主義によって近代社会とユダヤ人とが同一視されていたことから、ユダヤ教と資本主義との理論的融合を成し遂げた『ユダヤ人と経済生活』は、戦後様々な批判に晒されてきた。たしかにゾンバルトのこの問題作は、既に同時代から批判的なまなざしをもって迎えられ、その「ユダヤ教テーゼ」に対しても多くの疑義が投ぜられている。本稿を締めくくるにあたって、これらの同時代人による批判の内容に軽く触れておきたい。

ゾンバルトと「具体／抽象」図式を共有したヴェーバーの批判も興味深いものがあるが、ここではもはや詳細に論じる余裕は残されていない。ただ、『経済と社会』（1911-13年に草稿が執筆

された)の中の「宗教社会学」の章において、上述の「合理主義的ユダヤ教」という表象が、突如として前面に躍り出ていることを指摘しておこう<sup>(54)</sup>。ここで何より注目したいのは、同時代のユダヤ系知識人によるゾンバルト批判である。

『ユダヤ人と経済生活』に書評を寄せた彼らの議論を一瞥すれば、まずはゾンバルトの「資本主義」表象を支える意味構造に批判が集中していることに気づかされるだろう。たとえば、「資本主義は〔具体から抽象へという〕すべての価値の心理的転倒ではなく、……諸国の政治的・社会的基盤の転換と新たな形成の結果」であると見たり、あるいは、「需要の充足方法」こそ経済学で問題にされるべきであって、「需要〔のあり方〕そのもの」に区別を設けるのは「誤謬」として斥けたりする議論、さらには、手工業と資本主義との比較の中で、「資本主義経済の無遠慮さを中心に据えるのは歪曲」だとして、「重要なのは両経済に特徴的な無遠慮さの種類と特性」だと見る議論などはすべて、「具体／抽象」図式への攻撃に他ならない<sup>(55)</sup>。

だが注目すべきことに、一方でこれらユダヤ系の論者たちは、ゾンバルトによる「ユダヤ教」の表象を完全に斥けていたわけでもない。たとえば、ゾンバルトのテキストでは資本主義との結節点として、同じ「抽象」項の働きを担っていたユダヤ教の「合理主義」については、これらの論者も一致して承認しているのである<sup>(56)</sup>。

この点に関してゾンバルトが批判されたのはただ、「直観と知性の単純な対置ですべての理解が損なわれた」ことや、その反資本主義的心情から、あたかも「資本主義人間 *der homo capitalisticus* がすべて二本足の計算機械の一種」であるかのように描写されたことにある<sup>(57)</sup>。この批判によれば、「合理主義にも感情の温かな生活、自然な感覚、信念の人間的誠実さ、知覚の優しさや柔軟さは慣れ親しんだもの」であり、それゆえ資本主義的経済形態も、「ゾンバルトが描いたような〔感情を欠いた冷徹な〕人間など前提しない」のである<sup>(58)</sup>。言うまでもなく、ここで批判の対象となっているのは、「合理主義的ユダヤ教」という表象そのものではなく、その「合理主義」の意味内容を根底で支えていた「感情(具体)／規律(抽象)」という二項図式であろう。

このように、ユダヤ人によるゾンバルト批判では、純粹に事実に関わる論点を除けば、あくまで資本主義(精神)の意味構造に対する批判に終始しており、ゾンバルトが提出したユダヤ人の表象それ自体は、表面的にはほとんど覆されていない。むしろ、「ユダヤ人が資本主義の活動に対する適性を持つというゾンバルトの証明は、一面的である必要も歪曲する必要もなかった。ユダヤ人にこのような適性を賦与した諸特性は私の事物把握にもある」と、彼らにあってはユダヤ人と資本主義との親近性すらはっきり認められている<sup>(59)</sup>。ゾンバルトの議論の中で、ユダヤ人自身に受け容れがたいと映っていたものは、資本主義とユダヤ人との同一視それ自体ではなく、その同一視の奥底に潜む、ネガティブな意味作用に他ならなかったのである。

従って、これらユダヤ系知識人とゾンバルトとの対立点は、ユダヤ人と資本主義とを結びつけるか否かではなく、「資本主義」なる記号表現をいかに捉えるかという、ゾンバルト・テーゼの前提そのものに存していたと言えるだろう。そしてこれは言うまでもなく、ヴェーバーの『倫理』論文をめぐる論争においても、一つの争点であり続けた問題であった。

この争点の一致は、ヴェーバーとゾンバルトが共に、「資本主義」概念の説明をそれぞれ同一

の意味構造に基づけていたことの、一つの帰結である。既に明らかなように、この二人のテーゼには、資本主義の説明図式を歴史的現象（カルヴィニズムやユダヤ教）に当て嵌め、その当の現象から資本主義との親和性を導き出すという循環構造が見られるが、この循環は実のところ、「様々な虚構の坩堝の中で練り上げられた叙述の構造が、現実性の記号ともなり、証拠ともなる」という、「歴史の言説」一般に備わる「逆説」でもある<sup>(60)</sup>。ヴェーバーやゾンバルトに対する同時代人の批判はそれゆえ、一面ではまさにこの「虚構の坩堝」から作り出された一つの「叙述の構造」、言い換えれば、過去をことばで表現する一つの仕方の是非を、問い直そうとしたものと見ることができる。

#### 註

- (1) たとえば、経済の景気動向と平行して反ユダヤ主義者の言説に機能変化が生じていることを説いた、Hans Rosenberg, *Grosse Depression und Bismarckzeit. Wirtschaftsablauf, Gesellschaft und Politik in Mitteleuropa*, Berlin, 1967; ユダヤ人の資本主義社会での優越性の経験から経済危機における反ユダヤ主義のユダヤ人攻撃を説明しようとする、Reinhard Rürup, *Emanzipation und Antisemitismus. Studien zur „Judenfrage“ der bürgerlichen Gesellschaft*, Göttingen, 1975; 反ユダヤ主義を含む「フェルキッシュ思想」の構成要素として近代産業社会に対する敵意を挙げる、ジョージ・L・モッセ（植村和秀・大川清丈・城達也・野村耕一訳）『フェルキッシュ革命—ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』柏書房, 1998年。急激な工業化への危機感をコード化したものとして反ユダヤ主義の言説を論じた、Shulamit Volkov, *Antisemitismus als kultureller Code. Zehn Essays*, zweite durch ein Register erweiterte Aufl., München, 2000.
- (2) David Landes, “The Jewish Merchant. Typology and Stereotypology in Germany,” *Leo Baeck Institute Year Book*, vol. 19 (1974), p. 22; Eugène Fleischmann, Max Weber, die Juden und das Ressentiment, in: Wolfgang Schluchter (Hg.), *Max Webers Studie über das antike Judentum. Interpretation und Kritik*, Frankfurt a. M., 1981, S. 269; フリッツ・K・リンガー（西村稔訳）『読書人の没落—世紀末から第三帝国までのドイツ知識人』名古屋大学出版会, 1991年, 105,150頁。ジェフリー・ハーフ（中村幹雄・谷口健治・姫岡とし子訳）『保守革命とモダニズム—ワイマール・第三帝国のテクノロジー・文化・政治』岩波書店, 1991年, 249頁。モッセ（1998）, 187頁。
- (3) Detlev Claussen, *Grenzen der Aufklärung. Die gesellschaftliche Genese des modernen Antisemitismus*, Frankfurt a. M., 1994, S. 144.
- (4) Rosenberg (1967), S. 106 f., モッセ（1998）, 48頁。
- (5) 「資本主義」の多義性については早くから論議的にされてきた（Richard Passow, „Kapitalismus.“ *Eine begrifflich-terminologische Studie*, 1. Aufl., Jena, 1918）。
- (6) 「意味作用の行為は〔言語記号同士の〕差異に依拠しているのである。」（ジョナサン・カラー（富山太佳夫・折島正司訳）『ディコンストラクション I』岩波現代選書, 1985年, 151頁）
- (7) 以上の「意味構造」概念についての説明は、Klaus Holz, *Nationaler Antisemitismus. Wissenssoziologie einer Weltanschauung*, Hamburg, 2001, S. 31.
- (8) Passow (1918), S. 3.
- (9) ある箇所ではゾンバルトは、「たしかに、ユダヤ人はその人種的才能や抑圧された立場のおかげで、資本主義精神の生成に深く関与した」と述べてはいるものの、「その影響を過大評価してはならないように思われる」と釘を刺している（Werner Sombart, *Der moderne Kapitalismus. Die Genese des Kapitalismus* (Bd. 1), Leipzig, 1902, S. 390）。
- (10) Ebd., S. 195.
- (11) Ebd., S. 208.

- (12) Ebd., S. 195.
- (13) 以上の引用は, ebd., S. 196.
- (14) Ebd., S. 198.
- (15) Werner Sombart, *Der moderne Kapitalismus. Die Theorie der kapitalistischen Entwicklung* (Bd. 2), Leipzig, 1902, S. 63.
- (16) Ebd., S. 64.
- (17) Ebd., S. 64–70.
- (18) Shirō Takebayashi, *Die Entstehung der Kapitalismustheorie in der Gründungsphase der deutschen Soziologie. Von der historischen Nationalökonomie zur historischen Soziologie Werner Sombarts und Max Webers*, Berlin, 2003, S. 56.
- (19) Lujo Brentano, Die klassische Nationalökonomie (zuerst; 1888), in: ders., *Der wirtschaftende Mensch in der Geschichte. Gesammelte Reden und Aufsätze*, Leipzig, 1923, S. 4, 30; プレンターノ自身は「商業精神」Handelsgeistなる語を用いていた (S. 27 f.)。
- (20) Sombart (1902), Bd. 1, S. 197; vgl. Takebayashi (2003), S. 204.
- (21) Brentano (1888; 1923), S. 4, 25.
- (22) Ders., *Die Anfänge des modernen Kapitalismus. Festrede gehalten in der offensichtlichen Sitzung der K. Akademie der Wissenschaften am März 1913*, München, 1916, S. 115.
- (23) Max Weber, Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, in: *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* (以下 ASS), Bd. 21 (1905), S. 9; (梶山力訳, 安藤英治編『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』未来社, 1994年, 181頁) Sombart (1902), Bd. 1, S. 196.
- (24) Ebd., S. 55. (同上, 262頁)
- (25) カルヴィニズムの描写は, ebd., S. 11, 20, 28, 38, 16 f.; (同上, 184, 201, 214, 233, 192頁) ルター派の描写は, ebd., S. 22, 38, 38. (同上, 205, 233, 233頁)
- (26) Weber (1905), in: ASS, Bd. 20, S. 34. (同上, 131頁)
- (27) Ebd., S. 12. (同上, 88頁)
- (28) 大塚久雄はヴェーバーとプレントナーノとの理論上の相違を, それぞれ「産業資本の断絶性」を強調する立場 (ヴェーバー) と「商業資本の連続性」を重んじる立場 (プレントナーノ) とに分類し (『大塚久雄著作集』第8巻, 岩波書店, 1969年, 101–122頁), ゾンバルトが後者に与することを幾度となく強調しているが (たとえば, 同上, 6, 23, 46, 66, 83頁), 以上の議論で明らかのように, 「具体/抽象」図式に関してはむしろ, ヴェーバーとゾンバルトは同じ陣営に属している。
- (29) H. Karl Fischer, Kritische Beiträge zu Professor Max Webers Abhandlung „Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus“, in: ASS, Bd. 25 (1907), S. 238 f.
- (30) Brentano (1916), S. 117–157; 引用箇所は, S. 131, 144, 125.
- (31) Felix Rachfahl, Calvinismus und Kapitalismus, in: *Internationale Wochenschrift für Wissenschaft, Kunst und Technik*, Bd. 3 (1909), S. 1322; ラハファールによれば「伝統主義的需要充足経済」と「資本主義的営利追求経済」とは「相対的な対立」でしかなく, 「古くから人間には二つの範疇がある。」 (S. 1235)
- (32) Ebd., S. 1330–1332.
- (33) Weber (1905), in: ASS, Bd. 20, S. 19. (梶山訳, 安藤編, 99–100頁)
- (34) Ders., Antikritisches zum „Geist“ des Kapitalismus, in: ASS, Bd. 30 (1910), S. 193–196. (住谷一彦・山田正範訳「資本主義の『精神』に関する反批判」『思想』674号, 1980年, 98–99頁)
- (35) Ders., Antikritisches Schlusswort zum „Geist des Kapitalismus“, in: ASS, Bd. 31 (1910), S. 574 f.
- (36) *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe* (以下 MEGA), 1. Abteilung, Bd. 2 (1982), S. 166, 168 f., 167. (城塚登訳『ユダヤ人問題によせて・ヘーゲル法哲学批判序説』岩波文庫, 1974年, 62, 67, 63頁)
- (37) エンツォ・トラヴェルソ (宇京頼三訳)『マルクス主義者とユダヤ問題—ある論争の歴史 (1843–1943

- 年)』人文書院, 2000年, 46頁。
- (38) 貨幣の結晶化については, *MEGA*, 2. Abteilung, Bd. 10 (1991), S. 84–88. (向坂逸郎訳『資本論』(一) 岩波文庫, 1969年, 156–162頁)
- (39) *Ebd.*, S. 107 (Anm. 73), 108. (同上, 201, 204頁)『資本論』においてもなお「ユダヤ人」という名辞が貨幣の比喩として用いられている箇所がある (S. 142; 270頁)。なお, 以上のように「具体／抽象」図式を経済現象に当て嵌めて説明することは, 何もゾンバルトに限られたものではなく, 既にマルクスの『資本論』, とりわけその第一巻 (1867) で, この図式が頻繁に使用されているのが見て取れる。ゾンバルトのテキストに見られる「具体／抽象」という二項対立図式, ないしその図式を「資本主義」概念に応用する発想は, おそらくこのマルクスから借用してきたものだと考えられるが, ここで示唆されているように, 両者の間には見過ごすことのできない重大な齟齬もある。ここでは, マルクスのテキストを詳細に分析する余裕がないため, この二人の間に見られる齟齬については, 稿を改めて論じることにはしたい。
- (40) *MEGA*, 1. Abteilung, Bd. 2 (1982), S. 168 f.; (城塚訳, 67頁) Werner Sombart, *Die deutsche Volkswirtschaft im 19. Jahrhundert*, Berlin, 1903, S. 128.
- (41) マルクスが「市民社会」論から「資本家的生産様式」概念を定式化していく過程については, 重田澄男『資本主義の発見—市民社会と初期マルクス』御茶の水書房, 1990年を参照。
- (42) Sombart (1903), S. 130; *MEGA*, 1. Abteilung, Bd. 2 (1982), S. 164. (城塚訳, 57頁)
- (43) Sombart (1903), S. 131–133.
- (44) *Ebd.*, S. 132, 130.
- (45) Werner Sombart, *Der kapitalistische Unternehmer*, in: *ASS*, Bd. 29 (1909), S. 743, 715.
- (46) Sombart (1902), Bd. 1, S. 388 f.
- (47) Sombart (1909), S. 743, 748; ただ企業家と芸術家の間では, この「空想力」の種類が異なるのみだとされている (*ebd.*, S. 748)。
- (48) ゾンバルト自身, 「伝統主義／合理主義」の二項対立をヴェーバーから借用したものであると認めている (*ebd.*, S. 715)。ヴェーバーがルター派を「伝統主義」に, カルヴィニズムを「合理主義」に組み込んでいたことを想起されたい (Weber (1905), in: *ASS*, Bd. 20, S. 47 f.; 梶山訳, 安藤編, 156頁)。
- (49) Werner Sombart, *Die Juden und das Wirtschaftsleben*, München und Leipzig, 1911, S. 141 f., 155; (金森誠也・安藤勉訳『ユダヤ人と経済生活』荒地出版社, 1994年, 192–193, 207頁) ゾンバルト自身も中世キリスト教倫理を, 「真の手工業に特有なもの」としている (S. 149; 201頁)。
- (50) *Ebd.*, S. 247. (同上, 319–320頁)
- (51) *Ebd.*, S. 264 f., 319. (同上, 344–345, 415頁)
- (52) 以上の引用は, *ebd.*, S. 242. (同上, 312–313頁)
- (53) *Ebd.*, S. 292 f., 311. (同上, 382–383, 405頁)
- (54) 「宗教社会学」では, 「いかなる告解も, いずれかの人間による恩寵授与も, またいかなる呪術的秘蹟恩寵をも知らなかったという事実」に, ピューリタニズムを始めとする「禁欲的プロテスタンティズム」とユダヤ教との共通性が求められ, そこから両者が, 「倫理的に合理的な生活形成の発展という意味においては, 歴史上途方もなく強烈な力となった」と主張されている。これはもちろん, 「意志による衝動抑制的な醒めきった支配と, そして宗教的な目的に奉仕するための体系的な生活規制」としての「救済方法論の合理化」を接点として, 禁欲的プロテスタンティズムとユダヤ教とが互いに結び合わされたことを意味する (Max Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft*, 1. Halbbd., Köln und Berlin, 1964, S. 436 f., 421; 武藤一雄・藺田宗人・藺田坦訳『宗教社会学』創文社, 1976年, 239, 208頁)。つまりこの時点でのヴェーバーにとって, 禁欲的プロテスタンティズムとユダヤ教は, 「感情 (抑制されるべき衝動) / 規律 (体系的な生活規制)」という二項図式のうち, 共に「規律」項を体現するようになっている。ヴェーバーのゾンバルト批判の要の一つは, 「『同胞の間では』忌避されることが異

邦人に対しては許される」というユダヤ教の「二重道徳」を強調する点にある (S. 474; 309-310 頁)。言い換えれば、ヴェーバーの見たユダヤ教の中には、「規律」を支える「抽象」項と並んで、「自然な営利衝動」を司る「具体」項もまた共存しており、この点でゾンバルトのユダヤ人像とは微妙なずれがある。

- (55) Franz Oppenheimer, Die Juden und das Wirtschaftsleben, in: *Neue Rundschau*, Bd. 22(1911), S. 902; Ludwig Feuchtwanger, Die Juden und das Wirtschaftsleben, in: *Schmollers Jahrbuch*, Jg. 35 (1911), S. 410; Julius Guttman, Die Juden und das Wirtschaftsleben, in: *ASS*, Bd. 36 (1913), S. 165.
- (56) Oppenheimer (1911), S. 897; Feuchtwanger (1911), S. 416; Guttman (1913), S. 174.
- (57) Guttman (1913), S. 170, 174.
- (58) Ebd., S. 172, 174.
- (59) Ebd., S. 173 f.; Feuchtwanger (1911), S. 430; Oppenheimer (1911), S. 896.
- (60) ロラン・バルト (花輪光訳) 『言語のざわめき』みすず書房, 1987年, 183頁。「歴史の言説は現実に従っているわけではなく, 現実を意味しているにすぎないのだ。」(182頁)

(関西大学大学院文学研究科・博士課程後期過程)